

## 実践報告

### 教育の意味を問い直す造形実践

— 造形表現ゼミにおける2年間の実践と問い —

### Reconsidering the Meaning of Education through Artistic Expression

— Two Years of Practice and Inquiry in the Artistic Expression Seminar —

佐藤牧子 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本稿は、造形表現ゼミにおける「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を基盤とした2年間の実践を振り返り、その広がりとともに立ち上がった問いを検討するものである。実践は「人材育成」「社会とのかかわり」「大学の価値創出」「ESD教育」という観点から学内外へと展開され、一定の成果を得てきた。しかしその過程で、素材（廃材）と向き合い、迷い、試行錯誤しながら意味が立ち上がっていく造形活動における「まだ意味が定まらない時間」の重要性があらためて浮かび上がった。社会へとひらかれた実践の経験を通して、成果や評価では捉えにくい造形活動の過程そのものの意味を捉え直し、“教育”を迷い揺らぎながら進む営みとして再検討する。

キーワード: 造形表現、ゼミ活動、保育者養成、クリエイティブ・リサイクルセンターKG

#### 1. はじめに

本学造形表現ゼミでは、2024年度より「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を基盤とした実践を展開してきた。本実践は、地域から排出される廃材を造形素材として再編し、学内外の活動へと活用する仕組みを構築するものである。活動は、学生の学びの再構成を志向するとともに、地域との連携や展示、ワークショップ、情報発信へと広がりを見せてきた。

前年度には、センター設置の経緯および運営体制、特別支援保育ゼミとの協働、リカレント教育への展開について報告しており（佐藤・東・大野，2025）<sup>1)</sup>、本稿ではそれを踏まえ、造形表現ゼミにおける2年間の実践をあらためて振り返る。

本稿の目的は、社会へと展開したゼミの実践を整理するとともに、造形活動において素材に触れ、迷い、試行錯誤を重ねるなかで、まだ意味が定まらない「意味が立ち上がる前の時間」の教育的価値を問い直すことにある。

近年、教育実践には成果や可視化が強く求められる傾向があるが、そのなかで見えにくくなる時間や過程はどのように位置づけられるのかという問いが、本実践のなかで次第に立ち上がってきた。実践の広がりや一定の成果や反応を生んできたが、その過程において、廃材と向き合い、迷い、試行錯誤しながら意味が立ち上がっていく時間の在り方が、あらためて浮かび上がってきた。本稿では、その広がりや問いの関係を辿りながら、造形実践を通して、造形教育だけにとどまらず、教育における時間や過程の意味について検討する。

## 2. 第1期：社会へ広がる実践

造形表現ゼミでは、2024年度より、造形素材の共有と活用を目的としてクリエイティブ・リサイクルセンターKGの構築に取り組んだ。地域の企業や工場から排出される廃材を回収し、分解・整理したうえで造形素材として再編し、ゼミ活動および学内外の実践に活用する仕組みを整備したものである。

本実践は、「人材育成」「社会とのかかわり」「大学の価値向上」「ESD教育」という四つの観点を整理軸（図1）として位置づけながら展開された。以下では、これら四つの柱との関連を踏まえつつ、造形表現ゼミの活動とクリエイティブ・リサイクルセンターKGの実践の展開について整理する。



図1（左） クリエイティブ・リサイクルセンターKGの実践を位置づける四つの観点

図2（右） 竹の加工から行った流しそうめんの活動

### 2-1 人材育成の観点から

クリエイティブ・リサイクルセンターKGの構築は、造形表現ゼミにおける学生の学びの在り方を再構成する試みでもあった。廃材を素材として扱うことは、既成の教材とは異なり、素材の特性を読み取り、用途を構想し、試行錯誤を重ねる過程を伴う。学生は素材の収集や分類、管理にも携わりながら、造形活動の基盤づくりに関わった（図2）。

学内外で展開された実践では、素材に触れ、手を動かしながら構想を深める経験を重ねてきた。制作においては、自身の表現にとどまらず、施設（クリエイティブ・リサイクルセンターKG）を利用する人々やまだ出会っていない他者の存在を想定しながら構想する場面も生じた。こうした具体的実践を通して、素材の扱い方に加え、構想力や調整力、他者との協働を意識する姿勢を育むこと、そして将来教育に関わる人材として、他者を想像しながら場を構想する力を涵養することを志向してきた。

### 2-2 社会とのかかわりの展開

本実践は、学内にとどまらず、地域企業や行政との連携を通して展開された。素材の提供元との関係構築に加え、「第13回学生政策提案フォーラム in さいたま」への参加を通

して、学内で実践してきたクリエイティブ・リサイクルセンターKGの仕組みについて、行政が主催する場において発表する機会を得た。発表では、センターの充実と持続可能な運営の可能性について提案を行い、廃材活用を通じた創造の場の構想について発信した。

こうした取組は、造形活動を大学内部の教育活動にとどめるのではなく、社会の動きのなかで位置づけ直す試みでもあった。教育は学校の内部で完結するものではなく、社会にひらかれることによって深まり得るものだと考えている。学生が社会的な場で実践を語り、他者の視点に触れる経験は、自らの活動を新たな文脈のなかで捉え直す契機となる。

さらに、学生が自らの実践が社会に影響を与え得ることを自覚しながら生きることは、自身の価値を見直すことにもつながると考えている。本実践には、学生が社会に影響を与え得る存在であるという感覚を持ち、そのことを引き受けながら活動していくことへの願いも含まれている。

また、さいたま市見沼環境センターのこけら落としに際しては、廃材の紙を用いたウェディングドレスの展示を手がけた。廃材という素材の再構成を通して、環境と造形の関係性を可視化する試みであり、その後も継続的に作品展示の機会を得ることとなった。造形活動を通して社会とかかわる場を持つことは、社会との関係のなかで実践を位置付け直す経験でもあった。

### 2-3 大学の価値創出との関連

クリエイティブ・リサイクルセンターKGの活動は、大学の教育実践を外部に発信する機会ともなった。展示や報告の場を通して、造形教育の取組を可視化し、大学の教育活動を社会に向けて共有する契機となった。

同時に、本実践は、地域との関わりを通して大学の存在意義を問い直す取組でもあった。

大学は社会との往還のなかで成立し、その活動を地域にひらくことで信頼や関係性を積み重ねていくものだと考えている。卒業生や地域の親子を対象としたワークショップの実施は、「リカレント教育」や「地域に開かれた教育」を具体化する取組の一つであった。

さらに、こうした姿勢のなかで育った学生が将来それぞれの現場で活動していくことは、大学の教育実践が社会へと広がっていく可能性につながる。大学の価値は学内だけで完結するものではなく、学生の実践を通して社会との関係のなかで形づくられていく。本実践もまた、そのような循環の一端を担う試みであった。

### 2-4 ESD教育（持続可能な開発のための教育／Education for Sustainable Development）との関連

廃材を素材として扱う本実践は、持続可能な社会の形成を目指すESD教育とも関連している。素材の循環や再活用を体験的に学ぶことを通して、学生は環境と造形活動の関係だけでなく、廃材が生まれる社会の仕組みや地域の産業の実態についても具体的に考える機会を得てきた。

とりわけ、廃材に触れ、分解し、組み替え、再構成する過程は、環境問題を抽象的な知識として理解するのではなく、社会の動きの一端を自らの身体を通して引き受ける経験へと転換させる。素材と向き合い、試行錯誤しながら構想を深める時間は、造形活動と社会とのつながりを実感を伴って捉える場となる。

本実践では、楽しみながら取り組むこと、そして手を動かしながら考えることを重視している。そうした姿勢のもとで、環境や社会の動きを自らの経験として捉える学びの場を構想してきた。

## 2-5 図工・美術の授業展 2024「はみ出す力展」における実践の可視化

2024年度には、「はみ出す力展」(図3)においてポスター発表(図4)および展示を行った。2025年1月23日から26日にかけて八戸市美術館で開催された「はみ出す力展 vol.6 (図工・美術の授業展 2024)」は、武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」が主催する授業実践展であり、その後、川口市立アートギャラリー・アトリアにおいても巡回展示が実施された。本展示会は、学校の図工・美術の授業実践を広く共有し、「教科書におさまらないアート」の力や「はみ出す力」を問い直すことを主題としている。

クリエイティブ・リサイクルセンターKGの実践もまた、この枠組みのなかで紹介された。ポスター発表では、センターの構築過程や展開、社会との連携の様子を整理し、造形教育がどのように社会へと開かれていくのかを提示した。展示会という場において実践を可視化することは、単なる成果発表にとどまらず、実践の意味をあらためて言語化し直す作業でもあった。広がりを持った実践が、どのような問いを内包していたのかを再確認する機会ともなった。

### ● 図工・美術の授業展 2024「はみ出す力展 vol.6」概要

会期：2025年1月23日(木)～1月26日(日) 10:00～19:00

会場：八戸市美術館(青森県八戸市大字番町10-4)

巡回会場：川口市立アートギャラリー・アトリア

主催：武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」

共催：八戸市美術館 後援：青森県教育委員会、八戸市教育委員会



図3 図工・美術の授業展 2024「はみ出す力展」 Vol.6 案内チラシ

### アートで叶えるイロイロ

国際学院埼玉短期大学 佐藤 敦子

**はじめに**  
少子化により大学進学人口が減少している中で、4年制大学の入学受け入れ枠の拡大に伴い短期大学を運営する学生は減少する傾向にある。よって全国の短期大学は、定員割れの問題に直面している。また同時に、大学の美術教員は非常勤で働いている状況も起きている。

大学を取り巻く状況も、造形美術を取り巻く状況も、決して明るいとは言えない現状にあって、私は千葉県松戸市で長年「まちおこし」に携わる皆さんが教えてくれたことを思い出していた。

「町の課題解決は、みんなで圈をひそめて集まって、目の前の課題を解決しようと思えば成功しないんだ。楽しいことを考えながら、どんな町にしたいか、未来を見ながら加筆を教えることが大切なんだよ。そして、時々しか現れない人をいかに大切にできるかが重要なんだ。」

そこで私は、ソーシャリー・エンゲイジド・アートに注目し、アートの楽しさと創造性(クリエイティビティ)を存分に発揮し、さまざまな人と関わりながら、人材育成、教育の質の向上、地域貢献の課題、そして所属する短大の教職員が元氣になれることはいかに探った。

本発表では、課題を包括的に扱い、協力者の範囲を広げることを「はみ出す力」とし、担当する造形表現ゼミの取組みを紹介する。

※ソーシャリー・エンゲイジド・アート  
Socially Engaged Art  
社会課題や地域の問題に対し、アートを通じて人々の対話や行動を促し、共創的なプロセスによって社会実装やコミュニティ活性化を目指すアート活動。作品そのものよりも、参加者同士の協働やプロセスが重視される。

**■REMIDA (レミダ) について**  
イタリアのレッジョ・アプローチは、子どもの主体性を尊重し、子どもの想像性や創造性、探究心を伸ばす革新的な幼児教育として、今もなお注目されている。それらの学びを支える仕組みの一つが、地域や企業が連携し、廃材やリサイクル素材を集めた学習資源センターであるREMIDA (レミダ) と呼ばれる施設である。

**■クリエイティブ・リサイクルセンター-KG**  
造形表現ゼミでは、REMIDAにヒントを得て、地域の企業や工場から造形素材となりうる廃材を回収し、提供する側と受け取る側の双方のニーズや実態を調査しながら、「創造の拠点」となるクリエイティブ・リサイクルセンター-KGの仕組みをつくり運用と活用を始めた。

**■はじめに**  
少子化により大学進学人口が減少している中で、4年制大学の入学受け入れ枠の拡大に伴い短期大学を運営する学生は減少する傾向にある。よって全国の短期大学は、定員割れの問題に直面している。また同時に、大学の美術教員は非常勤で働いている状況も起きている。

大学を取り巻く状況も、造形美術を取り巻く状況も、決して明るいとは言えない現状にあって、私は千葉県松戸市で長年「まちおこし」に携わる皆さんが教えてくれたことを思い出していた。

「町の課題解決は、みんなで圈をひそめて集まって、目の前の課題を解決しようと思えば成功しないんだ。楽しいことを考えながら、どんな町にしたいか、未来を見ながら加筆を教えることが大切なんだよ。そして、時々しか現れない人をいかに大切にできるかが重要なんだ。」

そこで私は、ソーシャリー・エンゲイジド・アートに注目し、アートの楽しさと創造性(クリエイティビティ)を存分に発揮し、さまざまな人と関わりながら、人材育成、教育の質の向上、地域貢献の課題、そして所属する短大の教職員が元氣になれることはいかに探った。

本発表では、課題を包括的に扱い、協力者の範囲を広げることを「はみ出す力」とし、担当する造形表現ゼミの取組みを紹介する。

※ソーシャリー・エンゲイジド・アート  
Socially Engaged Art  
社会課題や地域の問題に対し、アートを通じて人々の対話や行動を促し、共創的なプロセスによって社会実装やコミュニティ活性化を目指すアート活動。作品そのものよりも、参加者同士の協働やプロセスが重視される。

### クリエイティブ・リサイクルセンター-KGの実践

以下、4つの柱で実践を分類して紹介する。

- 人材育成  
大学における人材育成は、専門的知識やスキルを学生に伝えることに加え、リカレント教育(卒業生や社会人が再び学ぶ)の役割も担っている。
- 社会とのかかわり  
産学官の連携などを通して、学生が社会にかかわり社会の中で育っていくことは、学生自身が体験を通して、社会に貢献し影響をもつ存在であることを認識する機会となる。シテズンシップ教育の観点からも重要である。
- 大学の価値向上  
大学は「知の拠点」として地域社会に貢献することを通して、大学の価値を向上することができる。
- ESD教育 (Education for Sustainable Development)  
ESD教育は「持続可能な開発のための教育」を意味し、大学では専門的な知識と実践力を通じて、持続可能な社会の創り手を育成する教育である。

2024年度 造形表現ゼミの実践

クリエイティブ・リサイクルセンター-KGをつくるために、造形素材になりうる素材を身近なところや企業から集めて、それらを活用したさまざまな活動を展開した。学歴教育では、廃材や産業パネルを黒板塗料で塗装して大きな落書きハウスを作り、子どもたちと一緒に黒板アートを楽しんだ。一流しそめんの活動では、竹を切ったり割ったりして素材と格闘しながら竹害問題にも触れた。

「第13回学生政策提案フォーラムinさいたま」にて、学内規模で実践しているクリエイティブ・リサイクルセンター-KGの仕組みを、行政の取組とすることで、センターの充実と運営の持続可能性が担保されること、結果として多くの市民に「つくる喜び」と「創造 Creativeの場」を提供し、「新たな価値」の創出が行えることを提案した。ブリティッシュの加工場から出る廃棄素材で衣装をつくり提案を行い、最優秀賞を受賞した。→

卒業生とその家族、地域の親子を対象にアートワークショップを行うことで、「リカレント教育」と「地域に開かれた教育」の場を提供することとなった。職場(保育園)で使っていたとセンターにある素材を持ち帰る参加者や、デジタル時代だからこそ、子どもには身体を通じた体験してほしいと願う保護者の声などが聞かれた。

一保育者を目指す学生にとって、幼児の体感を感じながら共に活動することは貴重な体験となる。

ゼミ活動を通して、つくることが表現することを楽しみながら、学内外の課題を自分ごととして捉える視点を育むことを目指して活動を行った。

お天気のいい日、コロナ禍で使用していた飛沫防止パネルの使い道を探るために、屋外にて紐を掛けてみた。アクリル板を通して見た空の青さ、木々の緑、見慣れた理髪店も何気ないことで新たな景色に見える。そんなことを通じてESD教育を進めていきたいと考えている。→

図4 図工・美術の授業展 2024 「はみ出す力展」 Vol.6 ポスター

以上のように、クリエイティブ・リサイクルセンター-KGの構築と展開は、「人材育成」「社会とのかかわり」「大学の価値創出」「ESD教育」という複数の観点と関わりながら広がりを見せてきた。実践は学内外へと展開し、可視化され、一定の評価や反応を得る機会にも恵まれた。

しかし、その広がりの中で成果や評価では語られない造形活動の時間が、次第に周縁化されていくことへの違和感が消えることはなかった。実践が社会とのかかわりのなかで位置づけられ、意味づけられていくほどに、私はあらためて問い直すことになった。造形活動において本当に大切にしたいものは何であったのか。広がりの中で、何が見え、何が見えにくくなっていったのか。

社会へとひらかれた実践の経験は、同時に、実践の原点を問い直す契機ともなった。次章では、実践の広がりを経て立ち上がってきた問いに焦点を当て、造形実践をあらためて捉え直していく。

### 3. 第2期：展開する実践と生まれた問い

#### 3-1 継続と展開

第1期において整えられたクリエイティブ・リサイクルセンター-KGの土台のもと、第2期のゼミ活動は展開されていった。廃材の収集・整理の体制は一定の安定を見せ、活動は

その基盤の上で進められていった。

### (1) 素材探し ―クリエイティブ・リサイクルセンターKGの継続―

第2期においても、廃材の収集・整理は継続して行われた。地域企業や施設との関係を通して廃材を探し、交渉し、回収する営みは、活動の前提として積み重ねられてきた。廃材は自然に集まるものではなく、社会の流れのなかで見出され、関係を築きながら集められるものである。その過程自体が、造形活動を支える基盤となっていた。

第2期には、新たに南河原商工会議所を学生とともに訪問し、南河原スリッパの取組について話を伺う機会を得た。製造過程で排出される端切れ等を素材として提供していただけることとなり、それらをセンターに持ち帰り、活用方法を探る活動を行った。提供された端切れを用いて、丸椅子のリメイク(図5)、くるみボタンづくり、クッションづくり(図6)などを試み、素材の特性に応じた再構成の可能性を探った。素材は単なる“無料の材料”ではなく、地域の産業や人々との対話のなかで託され、関係のなかで「素材」へと立ち上がっていく存在であることが、実践を通して学生たちにも実感されていった。



図5(左) スリッパの端切れを使いゼミ活動においてリメイクした丸椅子

図6(右) スリッパの端切れとクッション材を活用して学生が制作した「きのこクッション」

### (2) 保育施設におけるワークショップ [2025. 7. 13/2026. 1. 5]

保育園において廃材を用いたワークショップを実施した。本活動では、学生が一方向的に指導する立場に立つのではなく、子どもと学生が年齢や「教える/教えられる」という関係を越えて、〈つくる〉主体としてともに関わることを大切にしたい。廃材をはじめとする用途の定まらない素材を介して、同じ場で手を動かし、ともに構想し、試行錯誤する時間を共有することを重視した。

保育者を目指す学生にとって、子どもがどのような反応を示すのかを知ることは重要である。しかし本ゼミでは、それ以上に、子どもたちが創造的な活動に没頭しているときの、場の空気が変わるような瞬間、いわば創造の拍動のようなものを、自らの身体で感じ取ることが願って実践を行ってきた。素材に触れ、迷い、組み替え、思いがけないかたちが立ち上がる時、子どもも学生も同じ時間のなかで揺れ動いている。その動きに身を置くことが、本実践の中心にあった。

そこでは、完成へと導く指導というよりも、素材との出会いをともに引き受ける関係が重視された。学生は「教える側」として振る舞うのではなく、子どもとともに素材の可能性を探る存在となり、〈つくる〉時間を共有する場になっていた。

### (3) 「さいたま市環境フェア 2025」における学生ブースの運営 [2025. 10. 18]

環境フェアでは、クリエイティブ・リサイクルセンターKG およびさいたま市見沼環境センターで集められたパソコンのキーボードを分解・洗浄・乾燥・加工し(図7)、ワークショップの素材として活用した。さらに、南河原商工会議所を通じて提供された南河原スリッパ工場の端切れも素材として加えた。

学生は事前にこれらの素材を用いて、自らが当日身につける装身具や小物を制作した。キーボードのキーを再構成したアクセサリー(図8)や端切れを活用した装飾品を身につけ、当日はブースに立って来場者と向き合った(図9)。

当日のワークショップでは、子どもだけでなく大人も足を止め、廃材に触れながら制作に取り組んだ。用途が定まっていたはずのモノが、別のかたちで再構成されていく過程に、多くの来場者が関心を寄せていた。学生にとっても、廃材が社会の場でどのように受け止められるのかを体感する機会となった。



図7(左) 分解したキーボードのパーツ 図8(中央) キーボードのパーツで作られたイヤリング  
図9(右) スリッパの端材で学生がつくったヘアアクセサリー

### (4) さいたま市見沼環境センターにおける作品展示および啓発動画制作

[2025. 3. 19/4. 7/7. 12/11. 17]

見沼環境センターでは、廃材の再構成を通して環境と造形の間を可視化する作品展示を継続的に行った。展示では、学生が制作した作品(図10・11)や、造形的魅力をもつ廃材(図12)そのものを提示し、素材の可能性を来場者と共有する場とした。また、学生とともに、廃材を使った〈つくる〉活動の面白さを伝える啓発動画の制作にも取り組んだ。

制作した動画は、①国際学院埼玉短期大学のホームページ、②さいたま市学生政策提案フォーラムのサイト、③さいたま市見沼環境センターのホームページ、④さいたま市ごみ分別アプリなど、複数の媒体を通して公開された。大学内部にとどまらず、行政の情報発信媒体にも位置づけられたことは、実践が社会の流れのなかに組み込まれていく一端を示すものであった。活動の記録と発信を重ねることにより、実践を社会に向けてひらく試みが続けられた。

### (5) 素材への理解・探究

廃材を活用することは、一見すると材料費がかからないという利点に目が向きがちである。しかし実際には、廃材が出そうな場所を探し、関係を築き、交渉し、回収し、洗浄や加工を施すという多くの工程を経て、はじめて「素材」として用いることができる。その一連の過程を学生自身が経験することは、廃材が社会のなかで生まれ、関係のなかで再び位置づけ直される存在であることを体感する機会となった。

一方で、クリエイティブ・リサイクルセンターKGにおいて回収された素材が、必ずしも十分に活用されていないという現状もあった。素材がそこにあることと、それが「造形素材」として立ち上がることは同一ではない。常に〈つくる〉営みが身近にあり、素材と関わる機会があり、さらに加工のイメージやそれに伴う技術が備わっていなければ、目の前にあるモノを造形素材として認識することは容易ではない。この点については、ゼミ学生による卒業研究において、モノが造形素材として認識されるための条件について考察が行われ、その難しさが指摘されている。



図 10 (左) 学生が廃紙で制作したウエディングドレス 1 代目 図 11 (右上段) ウエディングドレス 2 代目  
図 12 (右下段) ストロー工場から排出されマテリアルリサイクルされる形状が魅力の白い塊

### 3-2 生まれた問い

第 2 期の活動は、第 1 期で整えられた基盤のもとで継続され、保育現場や地域の催し、展示や情報発信へと広がっていった。素材は集まり、活用され、社会の場においても受け止められた。実践は一見順調に進み、一定の手応えも感じられていた。しかし、その広がりの中で、私は次第に問いを抱くようになった。

**実践は、何かを達成し、証明し、評価されるためのものになっていないだろうか。**

保育園でのワークショップも、環境フェアでの学生ブースも、展示や動画制作も、それぞれに意義ある取組であった。実践は可視化され、社会的な文脈のなかで位置づけられ、

発信されていった。だがその過程で、造形活動のなかで大切にしてきたはずの時間が、後景へと退いているのではないかという感覚があった。

ある学生が廃材を前にして、「これ以外の素材でもありですか（これ以外の素材を使って制作してもいいですか）」と問いかけたことがあった。活動の途中でふと出たその一言は、用意された廃材だけでなく、別のモノも使ってみたいという素朴な気持ちの表れであったと考えられる。

しかしそのとき私は、自分が無意識のうちに「今日はこの廃材でやってみよう」と方向を定めていたことに気づかされた。活動を進めるためには一定の枠組みが必要である。しかしその枠組みが、学生の中に生まれかけていた別の可能性を閉じてしまっていないだろうか、と立ち止まることになった。

廃材は、もともと用途を終えたモノであり、何に使われるかが決まっているわけではない。その意味で、はじめから「造形素材」として完成された形で存在しているわけでもない。触れてみる、迷う、試してみる。そうした過程のなかで、少しずつ意味を帯びていく存在である。そのような時間を、私自身が無意識のうちに急いでいなかったかという思いがよぎった。

第2期の活動は確かに広がっていた。しかしその広がりを経験は、廃材と向き合うこの「まだ意味が定まらない時間」の価値を、あらためて私に問い返すものでもあった。実践が社会へと展開したからこそ、廃材とともに立ち止まり、「意味が立ち上がる前の時間」とどまることの重要性がよりはっきりと浮かび上がってきたのである。

### 3-3 図工・美術の授業展 2025「はみ出す力展」における実践の可視化

前年度に続き、2025年度に開催された図工・美術の授業展「はみ出す力展」（図13）においても、造形表現ゼミの実践をポスター形式で発表（図14）した。本展覧会は、図工・美術の授業実践を広く共有し、「教科書におさまらないアートの力」や「はみ出す力」を問い直す場として継続的に開催されているものである。

2024年度の発表では、クリエイティブ・リサイクルセンターKGの構築とその展開、社会との連携の広がりを中心に整理した。それに対し、2025年度の発表では、実践の広がりそのものよりも、その過程で立ち上がってきた問いに焦点を当てる構成とした。

ポスターでは、廃材を素材として扱う実践のなかで見てきた「意味が立ち上がる前の時間」に注目した。廃材は、もともと用途を終えたモノであり、何に使われるかが決まっているわけではない。その廃材が造形素材として立ち上がるまでには、迷い、試し、手を動かし続ける時間がある。その時間は、成果や評価としては捉えにくいだが、造形活動のなかで最も重要な過程の一つであることがあらためて浮かび上がった。

2025年度のポスターでは、保育園でのワークショップや環境フェアでの活動を紹介しつつも、それらを単なる成果として示すのではなく、廃材と向き合うなかで生まれた迷いや揺らぎの場面を取り上げた。実践をどのように広げたかではなく、どのような時間を大切にしようとしたのかを問い直す内容としたのである。

展覧会という場において実践を可視化することは、単なる報告ではなく、実践をあらためて見つめ直す機会となった。広がりを示すことと同時に、造形活動の原点に立ち戻る視点を共有することを、2025年度の発表の主眼とした。

● 図工・美術の授業展 2025「はみ出す力展 vol.7」概要

会期：2026年1月21日（水）～1月25日（日）10:00～19:00

会場：八戸市美術館（青森県八戸市大字番町 10-4）

巡回会場：大阪デザイン振興プラザ

主催：武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」

共催：八戸市美術館 後援：青森県教育委員会、八戸市教育委員会



図 13 図工・美術の授業展 2025 「はみ出す力展」 Vol.7 案内チラシ



図 14 図工・美術の授業展 2025 「はみ出す力展」 Vol.7 ポスター

### 「これ以外の素材でもありですか？」

2025年度、ゼミ活動は社会とのつながりの中で展開されていた。そんなある日、保育園での廃材を使ったワークショップを検討している最中、ゼミ生から「これ（廃材）以外の素材でも、ありですか？」と聞かれ、私ははっとした。学生の活動の場を広げ、社会とつながる実践を考える一方で、素材や方法の枠を私自身が先に決めてしまっていたことに気づいたからだ。この一言は、造形活動における（廃材を食む）**素材との関わりや、造形の時間**そのものについて、立ち止まって考えるきっかけとなった。

■造形活動における廃材の魅力  
 ①価値が未規定であること  
 正しい使い方や望ましい完成系が最初から定められていない。  
 ②不慣れであるがゆえに判断を要すること  
 形・大きさ・質感・量が変わらない廃材は、改めて想定した通りには使えず、選ぶ、組み合わせる、加工するといった主体的な判断が不可欠となる。  
 ③誤行錯誤が許容されていること  
 「もったいない」とされにくく、結果的に実験的な行為が生みやすい。  
 ④見方を変えると新たな価値が立ち上がること  
 廃材は関わり方を変えることで、ゴミから素材へ、不要物から可能性をもつ素材へと変質し、その価値の変わりやすさや可視化される。

■造形活動における素材とはなにか  
 改めて造形活動における素材について考えてみると、素材は最初から素材として存在しているわけではない。つまり、多くのモノは、はじめから造形素材の顔をしていない。  
 人が、モノに関わり、試し、格闘する中で、はじめモノは素材として立ち上がってくるのである。  
 素材に与える言合は、モノそのものの性質よりも、それをどう出すかによって大きく左右されるといえる。

■子どもと素材の関わり  
 評価や到達目標に固定されないノンフォーマルな場において、3年生のSちゃんは、ホウ砂と水と洗濯剤を使いスライムを作った。  
 水と絵の具で調整しながらイメージする粘度と色合いを目指す(A・B)。スライムにビーズや(C)、人工芝を入れる(D)。極の表裏の質感の違いを思い分けて、ビーズ入りのスライムを丸め・伸ばす(E・F)。人工芝やビーズの入ったスライムを風船に入れる(G・H)。光に透かしたり、投げたりして感触を確かめる(I)。この一連の過程には、完成させることや意味づけを目的とした行為は見られない。Sちゃんは、素材の状態や変化に際着しながら、操作し、変形させ、感触や動きを試し、確かめることを繰り返している。ここには、**意味や価値が問われる前に、素材との関わりそのものを味わう造形の時間**が確かに立ち上がっている。

■造形素材の顔をしていないモノたち  
 こうした素材顔に基づいて場をつつてみると、実際の造形の場では、別の顔が立ち上がってきた。  
 クリエイティブ・リサイクルセンター-KGは、さまざまな廃材を集め、分解したうえで造形素材として提供するためのにつくった場である。  
 しかし、運用を始めると、普段あまり造形活動をしていない学生から、細分化された部品のような廃材を前にして、  
**「何に使ったらいいかわからない」**  
 という声が聞かれるようになった。  
 あらかじめ使えそうかが明らかでない廃材は、ある者にとっては可能性を秘めた魅力的なモノとして映る一方で、そうした経験のない者にとっては、造形活動に用いる素材として認識されにくいのである。

**意味が立ち上がる前にある造形の時間**  
 造形活動の中には、意味や価値があるかどうかをすぐに問われない時間がある。素材と向き合い、評価に回収される前に手を動かして、試し続ける。その時間の中で生まれる「はみ出す力」を、どのように受け止め、許容していくのか。造形活動において、その点を改めて見つめ直しておきたい。

#### 4. おわりに

本稿では、クリエイティブ・リサイクルセンターKGを基盤とした2年間の実践を振り返り、「人材育成」「社会とのかかわり」「大学の価値創出」「ESD教育」という観点からその広がりや整理してきた。実践は学内外へと展開し、展示やワークショップ、情報発信を通して社会との接点を持ちながら進められてきた。

しかし同時に、その広がりの中かで、素材（廃材）と向き合い、迷い、試し、意味がまだ定まらない時間にとどまることの重要性が、あらためて浮かび上がってきた。成果や評価としては捉えにくいその時間こそが、造形活動の核心にあるのではないかという問いは、実践を重ねるなかで生まれたものである。

人材育成や社会との連携、大学の価値向上やESD教育といった整理軸は、実践を位置づけるために必要な視点である。しかしそれらと、造形表現活動としての核心をいかに両立させるのかについて、明確な答えを得たわけではない。むしろ、そのあいだで迷い、揺らぎながら実践を重ねていることこそが、本実践の特徴といえる。

迷いは停滞ではない。揺らぎは未熟さではない。素材（廃材）と向き合い、意味が立ち上がる前の時間に立ち会い続けること、その不確かさを引き受けながら進んでいくことこそが教育の営みであり、造形教育もまた例外ではないと考える。本実践もまた、その途上にある。問いを抱えたまま進み続けることを、造形教育の一つの姿として、今後も模索していきたい。

本稿は結論を示すものではなく、実践を通して教育の意味を問い直し続ける過程の記録である。

#### 倫理的配慮

顔が判別可能な写真の使用については、使用目的を説明のうえ、事前に承諾を得ている。

#### 謝辞

本実践に関わり、ともに〈つくる〉時間を重ねてくれた学生の皆さん、本学関係者の皆様、そして活動を支えてくださった行政ならびに地域の皆様に感謝いたします。多くの方々との関わりのなかで実践を重ねることができましたことを、ここに記して御礼申し上げます。

**著者の利益相反：**開示すべき利益相反はない。

#### 文献

- 1) 佐藤牧子, 東敦子, 大野琴絵：クリエイティブ・リサイクルセンターKGにおける取組み-造形表現ゼミと特別支援保育ゼミにおける教育実践 - 国際学院埼玉短期大学研究紀要 2025; 54: 44-56.